

シニアいきいきまつり

テニス事情

北 畠 宏

標記のイベントに参加頂いている会員有志にまず感謝を申し上げます。

平成13年のシニアいきいきまつり（以下まつりと略記）は第5回でしたが、テニスの実行面を仙台市テニス協会（以下市テ協と略記）に委されてからは4回目であって、この間の経緯を踏まえて、昨12年からそのスタイルがほぼ確定し、明年以降も踏襲されることになりそうです。まつりの目的は、60歳を越えた「高齢者の生きがいと健康づくりの場の提供」であって、多くの市民が参加し易い様にとの大前提の許に、原則として参加者に費用の負担は求めず、実行面を各団体が請け負うというものです。

しかし、会場の確保から経費の負担まで、お膳立ての全てを市が行うというのではなくて、円滑な運営を図るために、各団体の代表から成る実行委員会が（協議の末の最大限の合意をもって）実施するという形が採られているのです。

まつりの実行面は大別された二つの部会（種目競技大会と交流広場事業）がそれぞれの専門部会を設けて、足並みを揃えながら運営の一部に携わることになり、そこにはまた、主催者側の意図と参加者側の希望との仲介者としての側面もあるわけで、そのためにも幾度となく協議が繰り返されている実情でもあります。

平成13年の競技部会は16団体で構成され、10月27日～12月1日の日程で競技が行われましたが、この部会には、翌年のねりんピック全国大会派遣選手の推薦というもう一つの大きな役割が課せられていて、平成12年より別枠で繰り込まれるようになりました。

このことは、全国大会へ出場を希望する者は同じ希望を有する同志で戦いたいとする極めて自然的な発想に拠るものであって、当然のことながら、出場を希望しなければ、或いは、出場資格が無ければ、この枠には応募しない（出来ない）ことになります。全国大会への出場資格とは、①仙台市民であること。②過去2年間全国大会へ出場していないこと。であって、①は仙台市に活動拠点を有する近隣市外の方のまつりへの参加を認めていることへの現れであり、②はなるべく多くの方に出場の機会を与えようとする（全国的な）配慮なのです。

ここまでは競技種目に共通の取り扱いではありますが、団体の事情によっては以下の若干の特例が認められています。

（イ）参加費の徴収。無料を前提としてはいても、昼食・記念品等の当日の参加者に還元されるべき性格のものであれば可とする。

（ロ）60歳未満の参加。シニア世代の予備軍であって、程なく仲間入りするであろう年代の参加は認める。

（ハ）監督の取り扱い。選手としてではなく、監督としてのみの出場であれば、お世話役としての処遇に依り連続・隔年の出場を可としたい方針。

まつりの将来は保証されていないので、原則や特例などは年々の事情によって変えられる可能性があります。殊に、この5年間は予算は縮小の一途であり、市の移動に因る担当者の思い違いも有ったり、団体側の事情も不変とは言えなかったりで、それが故に実行委員会でごとに認識の共有化が図られている実情でもあります。

まつりは毎年の仲秋～初冬に開催されることは決まっていますが、その案内は事前の市政だよりで広報され、ポスターや具体的な要領などは市内115ヶ所（区役所、情報センター、老人福祉センター、各大会会場、市民センターなど）に用意されているので、参加申込書も上記の施設で入手して頂くことになります。（競技団体や実行委員会所属団体でも相応に保有していて、それぞれのルートでの配布が行われたりもしています）

ところで、私達の参加種目であるテニスの場合とは言いますと、おおよその事は皆様もご存知の通り、タダで一日遊べて、参加賞を貰ったうえに、若しかすると上位賞品も頂ける？という愉しげな雰囲気があります。その実行面を筆者の所属する市テ協が担当して4年を経過しましたが、足並みを揃えて実行している筈であっても、競技の性格や団体の事情などに因って歩幅まで一致させるのは難しく、それがまた特色でもあり市テ協にとっても悩みの種子や将来の課題だったりするわけです。

まつりに於けるテニス競技の特色と言えるものは

（イ）特例の55歳台も認めていて、男女別の年齢級、交流戦枠、全国大会予選枠のように級枠が多い。（全10級枠）

（ロ）したがって、賞品数、賞状数も参加者数の割りには多い（優勝カップも10コ）。

（ハ）上位入賞者の賞品メダル。予選組は金・銀・銅、交流組は金・銀、合計46コ。

（ニ）募集参加者数は80名（40組）程度。

以上が現行の内容ですが、それぞれの項目に悩みや課題が付随しているのです。

（イ）の60歳未満の特例を存続すべきものかどうか。全体の参加者数や将来の実行内容にも関わる問題です。

(ロ)の参加者数の割りに表彰者が多いという現状は、他の競技と比較しての意味合いもありますが、級枠数がへらなければ絶対数が変わらないのも事実です。

(ハ)の賞品がメダルとは市テ協側の希望でもありません。他の団体でもチームプレーが基本の競技ではやはりメダルを希望しています。

(ニ)の参加人数が多いと(ロ)の問題は目立たなくなり、主催者は歓迎でも、コート数やら順位決定の时限(筆耕人との兼ね合い)やらの制約もある事を考慮しての80名でした。

以上の事柄から更に内在する問題や課題が見えて来ます。

(ホ)まつりの趣旨や市の意向での、多くのシニア世代に参加を呼びかける手段として、全くの初心者を対象としたレッスン(手解き)も視野に入れる必要が有る。

(ヘ)高齢化が進むに連れて更に高齢級を設ける必要に迫られるのは必定なので、全体の級枠組みの再検討が急がれる。

(ト)全国大会予選を当年の春に実施する様に働きかける。これは各団体に共通する高齢者の希いと言えるし、(ヘ)とも関連する。

(チ)実行面を担う市テ協の行事や予算とも関わっている。賞品代や事務経費(印刷代や切手代など)が一律化された結果として、一位と二位の賞品代が共に1,000円で総計10,000円とか、切手代は3,000円まで、などというのは現状を賄うには足りないで、賞品だけでも市が安価に入手できるメダルを希望せざるを得ず(先々は不明)、切手代は一部相乗りの状況にある。

と、ここまでまつりの中でのテニスの事情を書き連ねて参りましたが、要は多くのシニア世代に愉しんで頂くためのご理解を得たいが為でした。

反省することも多く、これまでの様に顔見知りだけの集まりに終わらぬ様に、また、メダル狩り的な風潮を生じさせない工夫とか、諸氏のお知恵を拝借しながら今後にのぞむ心算です。

そのためにも、壮年テニス連盟の世話役のお手本とも言える菅野義治さんに、市テ協へ参画して頂いたわけで、主として壮年部門(当面はまつり)の担当が予定されていますので、皆様の更なるお力添えをお願い致します。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

ここ数年間で宮城県最大のスポーツイベントである宮城国体が成功裏に終わった。新世紀国体として補強に頼らず自前の選手だけで天皇杯を獲得出来たのは開催県の基礎点が多いというシステムのお陰でもあるが、出場した選手諸君がそれぞれ全力を發揮した結果でもあり、応援した県民の後押しが有ってこそでもある。

我々の関係したテニス競技においても、久々の成績を残したことは記憶に残る。好成績を残したのは、期待していた成年男子ではなく、あまり関心がなかった(失礼な言い方であるが)成年女子と少年男子であったからかもしれない。出場した選手の皆さんが、口頭とは違う多くの声援の中で、より一層の力を出して戦った。この結果は今後の更なる向上への推進力となるだろう。

成績と同時に、競技の運営も評判が高かったとのことで、その一部を担当した者としてはホッとしている。今回は、コートレフリーの担当での手伝いとして参加した。山形国体で運営に参加していた仲間の話聞いていた感じより準備が遅く、特に審判員の養成に関しては呼びかけ、実戦練習どちらも歯痒い位のスローペースであった。本番までに間に合うのかと危ぶむと同時に、担当者に大きな負担がくると思っていた。昨年の都市対抗でのチェックでは、運営、進行、審判のそれぞれに問題点が出ていた。審判では、絶対数の不足と技術の向上が必要であった。おまけに、ルールが改正され、8ゲームマッチがショートセットに変わるという大きな変化があった。人数の方は女子連の方々を中心として、多数の方々に参加していただき講習会、県の大会を通じての実戦訓練、連絡網などの体制が整備され、曲がりなりに動き出したのが5月末であった。このあと、県大会での実戦練習では選手にいろいろとクレームをつけられながら涙ぐましい努力と、経験を積んできたご苦勞は大変なものであったと思う。

9月の選手権での実習、国体前日の総合練習でも、まだ色々問題点があり、明日からの本番はどうなることかと不安で一杯であった。何かがあればそれはその時と覚悟を決めて対処しようと割り切って大会を迎えた。

当日になっても、色々変更があったり、連絡方法が変わったりで本当に不安な出だしだった。いざ、試合開始となったら、参加選手の協力もあってか審判に関しては意外にも、練習時にあったトラブルも無く順

調に進んでくれた。練習とは違ってかなりのスピードで飛び交うボールを正確に見極めるのは大変なことであるのに。選手の皆さんがお互いに正確なジャッジをしてくれた面もあるが、何かと大きなトラブルもなく進行したのは審判を勤めた皆様の努力の賜物である。

時には、講習会で叩き込まれた、際どい判定は選手の判定に任せろ、との基準を守り過ぎてオーバールールを忘れてしまっているのではと思われることもあった。これも、通常は在来線を利用していたのが、いきなり新幹線に替わった状態ではやむを得ない事であろう。一度だけ、SCUの「コレクション、イン」の言葉を聞いた時にはやってくれた、心で決裁を叫んだものだった。やっとソロ・コール・アンパイアがソロ・チェア・アンパイアとなったと感心したものだ。

自分の仕事は、審判上のトラブルが有った時の解決と試合の進行状況の連絡と、周囲の状況のコントロールであったが、過度の応援を牽制したり、観客の案内や解説をしたりと結構忙しかった。試合の方は、SCUの皆さんが本当に苦勞されて頑張ってくれたお陰で出番がなく進行していった。競技の運営面で、当連盟の多くの会員の皆様が、競技役員として参加され力を発揮したことが、評価につながったものと思う。最終日に宮城県の選手がコートに居たのはここ十年以上無かったことで、地元開催に花を添えてくれた。

今回の国体は財政難の折から出来るだけ簡素にという方針を貫いたとのことであるが、ハードを含めて約600億円の費用が掛かっている。利府の競技施設を始め県内各地に各種のスポーツ施設が建設、整備された。また、国体に多くの県民が何らかの形で触れたことでスポーツへの関心が高まったと言われている。新聞の川柳欄に、気になる次ぎのような句があった。

- ・ 国体が終わって元の町になり
- ・ イベントが終わり箱物ひと休み

テニス関係でも利府のテニスコート、シェルコムが出来、泉のコートが改修される等のハード面と、国体にむけての強化、普及活動、審判の養成等で実質的にテニスをプレーする人口が増していると思いたい。これらを活かして、テニスの裾野を拡げて行くことが国体開催の意義であろう。このためには、協会関係者のリーダーシップはこれまで以上に必要であろうし、我々がテニスを楽しみ、川柳とは意味が違うが出来た施設を休ませないで使いこなす事が大切と思う。



国体競技役員を体験して

及川和枝

宮城県で行われました、国体に進行委員としてお手伝いさせていただきました。

テニス競技役員として審判委員の、ソロチェアアンパイア・ロービングアンパイア・高校生のボールバージョンの活躍がありました。約120人のソロチェアアンパイア・ロービングアンパイアの方々は、3年ほど前から、C級審判員の資格を取り、国体に臨みました。その後は、机上講習、実技講習を重ね、又、今年の都市対抗テニス大会、県の選手権大会などで経験を重ね本番を迎えました。どの選手にもよい試合をしてもらいたいと、皆自信を持って緊張感一杯で審判をしていました。又、競技補助委員の180人からの高校生たちは、若さと機敏な動きで試合の進行を助けていました。

審判委員に直結して、試合をスムーズに運ぶための進行委員と言う仕事がありました。私もその一人としてお手伝いさせて頂きました。試合について熟知していなければならないと言う事で審判の勉強をし、各大会にかかわって来ました。

進行の仕事として、各県の監督から出るオーダーを受付け、試合開始までの短い時間にそれを基に、審判用紙に必要な事項を記入します。用紙と共に審判グッズ（バインダー・鉛筆・都道府県名プレート・ニューボール・ユースドボール・選手用赤リボン・メジャー・ストップウォッチ）を用意し、開始時間を確認し、配属された審判に渡します。試合を終了し戻ってきた審判用紙記入事項のチェックし試合結果になり、次の試合の準備にかかります。記入された審判用紙は、審判委員長のチェックを得て記録報道委員会などへコピーを回します。種目により異なる事はありますが、短時間で正確にこなして作業を進める等、チームワークと共に各委員会とのかかわりも大切でした。

ともかく、雨も降らず予定通りに行う事が出来、嬉しい限りでした。たくさんの方々の一人として、この宮城国体に参加できた事、テニスを続けて来てよかったと感じ、プレーする以外に本当にいろいろな事を学びました。マナー・ルール・試合運営の基礎・たくさんの方々にひとつひとつ教えて頂き、多くの方と知り合う事も喜びのひとつでした。私の人生に膨らみを持たせて頂き、感謝しています。



テニスとの出会い

加藤信子

ほぼ50年程も前の話である。「お前、体が大きいからテニスをやれ!。」という先生の一言で、私の中学入学後の部活は決まった。テニスのクラブがあるわけでもないのに、と思っていたら、急速男女4名ずつのメンバーが集められた。

体育はまだはだしがあたりまえの時代だったから、ラケットはもちろん、何もないのである。それからコートづくりがはじまった。ローラーは進駐軍あたりから払い下げてもらったと思うけれど、毎日ローラーをかけ、石灰で白線を引きコートを作った。

今でもローラー引きの夢を見ることがある。その頃、我が町にはスポーツ用品店などというものはないのだから、たしか、あの時は便利屋さん頼りで、仙台から買ってきてもらったと記憶している。忘れもしない、ラケットの値段、1,400円である。

昭和28年のことだから、今のお金にしたら、いくら位だろう。親に言い出さなくて、随分悩んだことを憶えている。かくて大河原中学校軟式庭球部の誕生である。仙南地方では、柴田郡に我が校一校、刈田郡では、白石と白川の二校しかなかったと思う。

という訳で、私達は毎年、卓球をやっていたという顧問の先生の指導で、本と首っぴきでルールをおぼえ、やっととなりのコートにボールを返せるという程度で出場した。とはいえ、毎年、県大会出場では、練習をしない訳にはゆかず、苦しくて苦しくて、高校に入ったら金輪際テニスなんかやるものかと思っていた。一年の時はたしかに文化部にいたのだけれどテニスボールの音を聞くと、がまんできずいつの間にかテニスをしていました。

軟式から硬式に変わりましたが、やっぱりこれからも続けてゆくだろう。

「奥井さんをめざせ!!」を合言葉に。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

軽井沢テニス参観にて

井澤秀雄

8月1日から5日まで軽井沢にて避暑およびテニスを楽しむ合間に「軽トー」テニス大会を見学する事ができました。

ここに「軽トー」の歴史について御紹介したいと思います。「軽トー」の歴史は古くジャパントイメズ社から優勝カップが寄贈された1917年(大正6年)が第一回大会とされています。また、一説には軽井沢会前身K. S. R. A. の時代以前の明治年間から行われていたとも言われています。当時はジャパン・ア

ドバタイザー紙からも後援していただいております。英字新聞2社がかかわりを持っていたことは、外国人選手の参加者が多かったという、当時のこのトーナメントの性格を物語っています。

以後、「軽トー」には有力日本人選手も参加するようになり、歴代の優勝者にはデ杯選手が数多く名前を連ねています。太平洋戦争中の2年間(1944, 45年)は、残念ながら中止となったものの、翌1946年には早くも再開されました。1970年代に入ると、テニス人口は急激に増え、「軽トー」の参加者数も膨大なものになりました。旧道の軽井沢会コートだけでは試合が消化できなくなり、鹿島の森、日本信販コートビー、町営コートなどを併せて使用することになりました。しかしながら「軽井沢会コートでプレーすることに意義がある」という参加者の意見も多かったことから、シングルス種目を中止し、ダブルス種目のみとして、すべてが軽井沢会コートで開催されるようになりました。以後、男子シングルスは、選抜男子シングルス(1977~87年)の時期をはさみ、1988年から正式種目として復活し現在に至っています。現在の参加者数はのべ1000人弱、参加者の年齢も

下は小学生から上は80歳の方まで多岐にわたっています。開催種目も、今年、21世紀記念として

「135歳混合ダブルス」を開催し、「男女ダブルス」「混合ダブルス」「男子シングルス」「各年齢別ダブルス」「ジュニアシングルス」と全15種目となり、近年稀にみる大きな規模の大会に成長しました。

夫婦のみならず、親子、兄弟ペアによるダブルスへの参加や活躍が目立っています。一家総出の応援も多く、非常にファミリー色が強いことも、「軽トー」の特色の一つでしょう。参加者のレベルも年々向上しており、各種目で熱戦が繰り広げられています。

各参加者クラブ名も、鎌倉、平塚、武蔵野、各ローンや神宮、田園、T. C. , 東京グリーンと関東地区が多く参加されていました。

65歳の試合では、遠くから見ていると、本間さんと姿が似ている選手ではないかとちがづいて見ると本当に本間さんが試合をしていました。試合後ひさしぶりにお話しすることができました。7月30日から8月5日まで勝ち進む事ができ、決勝戦では奮闘しましたが敗れ準優勝されました。

皆さんも軽井沢で避暑兼テニスを大いに楽しみ多くの友人との交歓ができる事を願っております。

紙面を借りまして近況報告と会員皆様のご発展を祈念しております。

テニスと私

郷右近 勝子

私とテニスとの係わりは、今から17年前に利府町しらかし台団地に引っ越したことに始まります。この団地は、周りの自然環境もさることながらテニスコートや野球場などの運動施設が整っていて、さぞ長生き出来そうなところだと思いました。2ヶ月位過ぎ一息付いたある日、町主催のテニス教室開校のチラシがポストに入れてありました。その時は、今思えばまったく他人事のように、テレビでしか観たことのない、まるで上流社会の人々のスポーツと受け取っていました。

ところが、何の前触れもなく突然に、うちの“とうちゃん”（主人の呼び名）が、ラケット、シューズ、ウェアのテニス一式を買って来て、「さー、テニスをやってみなさい。」と言われたのが直接のきっかけでした。最初は気恥ずかしさが先に立ち、買ってもらったスコートを履く勇気がなく、長ズボンでコートに立ちました。また、やけに大きいラケットにも係わらずテニスボールがチットも真ともに当たらず、ほとんど嫌になりました。それでも、テニス教室が終わるとサークルが結成されその仲間に加わることで、その後テニスを楽しめることができました。

そんな私でしたが、今では“とうちゃん”はじめ子供達からテニス病と思われる程ののめり込み様で、多くのテニス友達が出来たお陰で、旅行を兼ねた他県へのテニス修行?にも参加しています。テニスを始めた頃を思い出すたびに、どんなことがあっても「テニス・・・」のテニス三昧に生きていることが信じられない心境です。またシーズンを通じて太陽を一杯浴び、真っ黒になっていますが、お陰で以前に比べて体も丈夫になり、風邪をひくこともなく健康になりました。

私は専業主婦のこともあり、このテニスの外にも地域では福祉関係のボランティア活動にも参加しています。その活動の中で気づいたこととして、私の様に年間を通して太陽光を浴びることが、どんなに健康的かを身を持って実感しました。そこで、この健康的（心身共に）な活動を私だけでなく、多くの皆さんにもわけてやりたい気持ちが一杯で、今後は是非、一人でも多くの方々にテニスを勧めていけたらと思っています。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

暑さとの戦いの日

古屋 広子

先日は、フーフダブルス大会に参加させて頂き、有り難うございました。

仙台には、3月の転勤で参りまして、当日（7月23日）がデビュー戦ということで、とても楽しみにして

おりました。そして、その日がやってきましたが・・・「なんて暑い!」。北海道、青森と、涼しい所から南下して参りました私達にとっては、大変な真夏日での試合となりました。

北海道生まれの北海道育ちで顔は真っ黒ですが（もとは色白）白クマのような主人は、試合の始まる前からもうバテバテで、3試合が終わった時点で冷たいシャワーを頭から浴び最後の試合に臨んだのでした。しかし、頭もパニック、午前中と風向きが反対になっているのにも気づかず、ストロークもロブも本人は計算したつもりで、風上の時も大きく打ってアウト!アウト!の連続。相手チームの鈴木さんから「風があるからね。」とせっかくアドバイスをいただいたにもかかわらず「なぜだー。」とつぶやきながらショットを打ち続け、あつと言う間に試合終了となりました。

――その夜の二人の反省会

夫婦だと言いたいことを言ってしまうのですが（私だけでしょうか?）やっぱりこの日も・・・、でも、話し合いの中で、夫の深い愛を感じた私は「心を入れ替えて、夫の言うことに耳を傾け頑張ろう。」そう決意しました。次回の試合では、二人の良さがだせる試合にしたいと、私は密かに闘志を燃やしています。なにはともあれ、おまいかけず賞品もいただき、本当に楽しい一日になりました。そして、その日の暑さ以上に驚いたことは、相手チームとなった先輩の方々の気力と体力!。私の両親の年代のご夫婦もいらして、そのすばらしさに感動いたしました。

私達もあの年代までテニスが続けられるのでしょうか。目標がまた一つ増えました。最後になりましたが、縁あって仙台の皆様にお逢いできました。このご縁を大切に、これからもいろいろな行事に参加させていただきたいと思っております。今後とも、どうぞ宜しくお願い致します。

そして テニスはドラマ?

技量別ダブルス大会が、8月26日に行われました。私達はC級に挑戦し、なんと思わぬ優勝を手にすることが出来、いま信じられない気持ちでいっぱいです。

実は試合前日まで、私は両手足になぞの湿疹、主人は風邪でダウン。二人そろって、病院の待合室で、「今度の試合、どうしようね・・・。」と、悩んでいたのです。当日は、二人とも薬持参で試合に望んだのですが、準決勝を戦い終えた時、主人の異変。上半身烏肌で、腕には大きなブツブツ!。それを見た時、そんなに具合が悪かったのかと、私は愕然としました。「もういいから、試合辞退しようか?。」と問いますと「だめでもともと、今まで対戦したチームそして相手チームに失礼だから頑張る。」との返事。

私はなんと主人に頼りきりの試合をしてきたのだろうか、と、ハッとしました。そんな事があり、私が本気で、出来る限りの力を出して試合をしようと心に誓った決勝戦が、始まりました。

リーグ戦を勝ち上がった時、いつも一緒に練習する大先輩の助言をいただきました。「ここまで来たんだから、古屋さん、燃えるんだよ！」と。試合で燃えることを知らなかった私は、試合の途中、何度その言葉をつぶやいたことでしょうか。そして、一度は手にしたかった二人の優勝カップが欲しいという一念で、一生懸命主人と頑張りました。その時、いつも主人に言われていた「前で打つんだよ！」という言葉が頭の中を駆けめぐり、気が付いたらいつもよりネットにつめ前でプレーをしている自分がいました。前へ出る勇気がなかった私が、主人のアドバイスに耳を傾け、初めて前へ詰め踏み込んで打つことが出来た試合でした。

けがの功名とでも言ったら良いのでしょうか、二人の心が一つになって、夢が叶いました。夫婦っていいなあ。そして、テニスって素敵ですね。

遅くまでお付き合いいただきました役員の皆様、そして応援して下さった皆様、本当にありがとうございました。次の日から、しばらく寝込んでしまいましたが、今は元気になり、やっぱりテニスに燃えています。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

第11回

東北テニスマスターズ

交流大会参加報告

和田忠彦

去る10月18・19日、福島県『羽鳥湖高原、レジーナの森テニスコート』を会場に、表記大会が開催されました。

この大会は、東北6県のシニア（女子50、55、60、65歳以上、男子60、65、70歳以上）テニスプレーヤーが毎年この時期に集い、技を競い親交を暖め合う貴重な交流の場でもあります。

我が宮城県は、女子16名、男子12名計28名が参加できました。因に各県の参加状況を見えますと、青森県女子9名、男子10名計19名。秋田県女子10名、男子17名計27名。岩手県女子8名男子20名計28名。山形県女子4名、男子8名計12名。福島県女子29名、男子37名計66名。参加総数180名でした。

競技種目の参加傾向は、次の通りです。女子の部=50歳~5ペア、55歳~15ペア、60歳~12ペア、65歳~7ペア。男子の部=60歳~22ペア、65歳~16ペア、70歳~13ペアとなりました。

競技は2日間に渡って行われました。1日目は、夜半の雨はあがったものの標高700メートルを超える高原ということもあり冷気と風に悩まされました。

2日目は、少しは風はあったものの絶好のテニス日和となりました。

競技結果の各県別人賞メダル数は下記の通りです。

◇宮城県 女子の部=65歳金メダル2個、銅メダル2個、55歳銅メダル2個。男子の部=70歳銀メダル2個、65歳銀メダル2個、60歳銅メダル2個。

◇青森県 女子の部=60歳銀メダル2個。男子の部=70歳金メダル2個、60歳金メダル2個。

◇秋田県 女子の部=65歳銀メダル2個、55歳銅メダル2個、50歳銅メダル2個。男子の部=60歳銀メダル2個。

◇岩手県 女子の部=入賞なし。男子の部=65歳銅メダル4個、60歳金メダル2個、銅メダル4個。

◇山形県 男女共入賞なし。

◇福島県 女子の部=60歳金メダル4個、銀メダル2個、銅メダル4個、55歳金メダル2個、銀メダル4個、50歳金メダル2個、銀メダル2個。男子の部=70歳金メダル2個、銀メダル2個、銅メダル4個、65歳金4個、銀メダル2個、60歳金メダル2個、銅メダル4個。

1日競技終了後、交流促進センターで行われた(18:30~21:00)レセプションは、開催地の選手でもある久米氏(プロのミュージシャン)が、ラケットを金管楽器に持ち替えての名演奏を約1時間半に渡って披露され、座を大いに盛り上げてくれました。

また、大会事務局の企画で参加選手の最高齢者へ健康を称える表彰及び記念品が男女各一名に授与され、女子では、我々の仲間である奥井紀美子さんが、めでたく受賞されました。誠におめでとうございました。

2泊3日の本大会は、開催地事務局の周到な準備と参加選手団への気配りを戴き、宮城県選手の宿泊施設は、3つのペンションと2つのコテージに分宿とはなりましたが、選手の中には、ご希望通りご夫婦水入らずの個室を用意いただくなど、改めて、大会事務局および開催地の皆さんに感謝申し上げたいと思います。

閉会式では、次年度開催される山形県天童市運動公園テニスコートでの再会を参加者共々が約束し合ってそれぞれの帰途につきました。

宮城国体

コート・レフェリー

剣持 啓子

「みやぎ国体」の文字を目にはしていたけど、自分が本当にそれに携わることになるかどうかは考えてもいませんでした。数年前に取得していたC級審判員の資格も活用する機会もなく、更新時には返上しようと思っていたら、国体まではということで、その後、講習会にもたびたび参加することになりました。これまで知らなかったテニスのルールについてずいぶん教えられ、勉強する機会に恵まれて良かったと思っています。

ところで、国体での私の役目はコートレフェリーでした。真のレフェリーならとんでもなく重い役目ですが、確かに試合が始まり、終わったということを確認し、順調な試合の進行を助けるのが、その中味かと理解しほっとしました。それにしてもSCUの皆さんの堂々たる態度には感心しました。短期間によくあれだけできるようになるものだなあと感じました。自分の担当の試合中にはSCUに呼ばれたりコートに行く機会が生じないようにと願っていましたが、幸いスムーズに進行しました。

この大会中に京都から代表で来た選手とお話する機会があり、日頃の練習や仕事のことや転戦の様子など教えてもらい、遠い存在であった選手がぐっと近くなりました。こういう機会も国体はくれるものなのです。またこうして私が原稿を書くはめになった(?) 壮年テニス連盟の皆様にも数年ぶりにお会いし、長いこと会費納入だけの会員だった私に暖かい挨拶を交わしていただきとてもうれしかったです。ご活躍の皆様をさしおいて私の感想を書きました。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「何時の間にかそんな歯合に」

奥井 紀美子

平成13年10月18～19日、福島県のレジーナの森で開かれた第11回東北マスターズテニス大会に参加しました。その初日の懇親会の折、幹事の方から「表彰されるので前の方の席にいて」と云われ、はて、何の事かしらと戸惑っていましたところ、参加者の中で最高齢者と聞かされ、そうかと納得。

齢をとるなんて息をしていれば誰にでも出来ることですが、元気でテニスを楽しんでいると云うことで、有り難いことにご褒美を頂戴いたしました。そういえば何時の間にか今年には喜寿を迎えました。この齢で比較的激しい運動のテニスが出来るとは、本当に有り難いことで、丈夫に生きてくれた両親に感謝、周りのテニスの仲間の暖かな心遣いに感謝です。

仕事を定年退職してから、60の手習いで始めたテニスでしたが、丁度そのころ「ねりんピック」が始まり、1988年(第1回)から1995年の間に5回も参加させて頂きました。あの頃は女性の該当者が少なく予選などなく、よき時代(?) だったのです。世の中全体が高齢者の面倒見が良くなる頃でしたので、その波にのってよい思いをさせて頂き、テニスとは切っても切れない仲となってしまいました。澄み切った青空に黄色のボールが舞い上がる。思わず「ワー! 気持ちいい」と叫びたくなります。「元気で有り難い!」、
「平和なればこそ」、と感謝の気持ちで一杯になります。これこそが元気の秘訣と言えましょう。(一汗かいて、その後の一杯。これもまた元気の源かも)
全国には80歳を過ぎて背筋をピンとのばした女性テニスプレーヤーが何人かおおいでになります。幾つ迄出来るか神のみぞ知るですが、平均寿命迄まだ間のあることだし、テニスを通じて知り合った沢山の仲間と楽しいテニスを続けたいと願っております。

どうぞ面倒をみてやって下さいね。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

平成13年度

いわきVTC親善試合

佐々木 宏昭

10月6、7日の両日、かんぼの宿いわきに宿泊しながら、当宿のコート(砂入り人工コート)で熱戦を繰り広げました。この親善試合は14回を迎えました。その歴史と内容に重みを感じられる大会でした。

MVTFからの参加者は、女子9名、男子10名の計19名でした。主管のいわきVTC側は、女子12名、男子15名の計27名でしたが、さらに、福島VTCから男子6名の飛び入り参加もあり、総勢52名での大会となりました。わがMVTC側の人数が若干不足しましたので、福島VTCの6名を外人部隊として「雇用」しての対戦でした。

親善試合の内容は、男子ダブルス16試合、女子ダブルス12試合、混合ダブルス16試合の合計44試合を実施しましたが、結果はなんと、12勝32敗と大敗を喫してしまいました。「地元の利」もあったでしょうが、いわきVTCの若さと意気込みで完敗でした。

懇親会は、カラオケ大会、舞踊、ダンス、仮装と盛り沢山のテニスの試合結果程の大差はなく、まあまあ互角?の対戦結果であったようです。

「かんぼの宿いわき」の素晴らしい施設のもと、爽やかな汗を流した者だけの充実感を抱いて、「また来年ね!!」と再会を約束しました。いわきVTCの皆様には大変お世話になりました。

平成13年度大会記録

平成13年度に開催されました各種大会の記録です。宮城県壮年テニスれんめい主催の記録は三大大会の優勝組です。仙台市、宮城県、東北、日本の各テニス協会主催の公式戦等については優勝者(組)および準優勝者(組)の記録が掲載されています。毎年、後期の会報(発行時期は12月下旬)に記録を掲載予定です。記載漏れのないようにするために、皆様のご協力をお願いいたします。各種大会に出場され、好成績を得られた場合は事務局までお知らせ下さい。お願いいたします。

大会名称	主催	期日	会場	種目	氏名
年齢別ダブルス大会	宮城県壮年テニス連盟	5/20	泉	女子40歳以上優勝	細野智恵子 杉山淳子組
				45歳以上優勝	高橋民子 置田真樹子組
				50歳以上優勝	石亀幸子 木下祐子組
				55歳以上優勝	小峰良江 渋谷みよ組
				60歳以上優勝	渋谷妙子 斎藤久仁子組
				65歳以上優勝	鈴木暎子 梅崎三枝子組
				男子45歳以上優勝	会澤正美 片平信行組
				50歳以上優勝	庄司信雄 但野久雄組
				55歳以上優勝	岩月尚文 岩月矩之組
				60歳以上優勝	池田 稔 松山真水組
70歳以上優勝	久保寿一 桑原義美組				
技量別ダブルス大会	宮城県壮年テニス連盟	8/26	泉	Aクラス 優勝	和田忠彦 片平信行組
				Bクラス 優勝	工藤和夫 北野寿一組
				Cクラス 優勝	古屋広子 古屋 泰組
				Dクラス 優勝	田口 茂 守田 忠組
混合ダブルス大会	宮城県壮年テニス連盟	10/21	泉	Aクラス 優勝	佐々木宏昭 佐藤勝子組
				Bクラス 優勝	古屋広子 古屋 泰組
				Cクラス 優勝	八重樫トモ 中村克宏組
				Dクラス 優勝	塩地淳一 菅野志津子組
宮城県テニスマスターズ春季大会	宮城県テニス協会	5/19	シェルコム	女子55歳以上優勝	八重樫トモ 郷右近勝子組
				60歳以上優勝	北野妙子 大賀やす子組
				65歳以上優勝	鈴木暎子 梅崎千枝子組
				男子60歳以上優勝	安田 勇 松山真水組
宮城県春季テニストーナメント	宮城県テニス協会	4/7~	川内	男子55歳S 優勝	佐々木宏昭
				男子55歳D 優勝	佐々木宏昭 高橋龍夫組
				準優勝	星 将博 (池田一志)組
宮城県テニス選手権大会	宮城県テニス協会	9/15~	泉	男子55歳S 優勝	佐々木宏昭
				準優勝	岩月矩之
				男子55歳D 優勝	星 将博 (池田一志)組
				準優勝	佐々木宏昭 長田輝夫組
東北ベテランテニス選手権大会	東北テニス協会	7/30~	八戸	男子60歳D 準優勝	松山真水 有賀吟生組
				男子70歳D 優勝	川口温弘 (小野敏雄)組
関東オープンテニス選手権大会	関東テニス協会	6/1~	朝日生命 久我山	男子70歳D 優勝	川口温弘 (小野敏雄)組

※※

国体苦勞話

沢山の人々の協力と熱意の賜物でしょうか、第56宮城国体は、事故も無く、大きなトラブルも無く、宮成功裏に終わったというのが大かたの見方です。過去の国体で、開催県側が苦勞したところを二つ集めてみました。

①熊本国体、神奈川国体等では、会場が2ヶ所以上に分散してしまった結果、ボールバスンから駐車場整理班まで全ての面で2倍以上の人員を必要とし、大会進行のための連絡および時間調整に予想以上の苦勞があった。出場する選手達も自分達の県の応援が出来なくて、他会場の様子が判らず苦勞が出た。

②テニスコートが透水性でない場合は、降雨がある度にゲームを中止し、コートの整備に時間と人力を必要とした。室内コートを持たない場合は、日程の都合により予定全試合を消化出来ないこともあった。栃木国体(前橋市)では、テニス競技を天皇陛下でご覧になる予定であった。当日は朝からの降雨で試合は中断していたが、

天皇陛下のご来場に合わせて、国体競技以外の模範試合(開催県の選手による模擬試合)をした。これも、室内コートあるいは透水性コートが無いために生じた問題であった。

室内コートがある場合も、照明の照度が不足(ほとんどの室内コートが照度不足です)しており、選手から苦勞が出た。

今回の宮城国体では、会場が一つであり、選手の宿泊場所から会場までの交通の便が良かった。コートが改修を終えたばかりで、全てのコートが同じコートコンディションであった。シェルコム仙台の室内コートが予想以上に選手に好評であった。そして、好天に恵まれた。等など好条件がそろったと考えられる。出場する選手にとって、天候とコートコンディション、宿泊および会場までの交通手段がよければ、全神経を集中して試合が出来るので、勝敗に関わらず満足度は大きい。問題が生じる余地はほとんどないと思われます。この辺りにも「成功」の鍵があったのではないのでしょうか。

平成13年度
行事実施報告

運営委員会

平成13年度、連盟が開催した行事およびその参加者数を纏めたものが下表です。シェルコムせんだいの室内コートを使用してのテニスの集まりには、冬期間ということもあり、沢山の方々がお集まりになりました。しかし、宮城野原県営コートでのWEEKDAY交歓会は、例年ほどの参加者がなく、参加料で、コート代を賄うことが出来なくて、赤字になっておりました。県営コートの場合、4面使用しますと、コート代は一日で19,600円となり、800円/人の会費としますと、25人の方々の参加が必要となります。ボール代をくわえますと、少なくとも30人前後の参加が望まれます。WEEKDAY交歓会に新鮮さが無くなり、マンネリ化したのが原因なのでしょう。早急に、委員会での検討を行う予定です。三大イベントおよび連盟祭りについては、ご好評を頂き、例年通りの盛況でした。会員の皆さんのご意見を取り入れ、魅力のある催しにして行きたいと考えております。

期日	行 事		
1/18(木)	WEEKDAY交歓会	SS	90
2/ 2(金)	WEEKDAY交歓会	SS	48
3/25(日)	室内ダブルスを楽しむ会	SS	67
4/20(水)	WEEKDAY交歓会	宮	19
5/20(日)	年齢別ダブルス大会	泉	94
5/22(火)	WEEKDAY交歓会	宮	14
6/13(水)	WEEKDAY交歓会	宮	22
6/26(火)	WEEKDAY交歓会	宮	30
7/ 6(金)	WEEKDAY交歓会	宮	21
7/22(日)	フーフダブルス大会	泉	60
7/31(火)	WEEKDAY交歓会	宮	24
8/26(日)	技量別ダブルス大会	泉	72
9/ 5(水)	WEEKDAY交歓会	宮	26
9/18(火)	WEEKDAY交歓会	宮	29
10/ 3(水)	WEEKDAY交歓会	宮	29
10/18(木)	WEEKDAY交歓会	宮	25
10/21(日)	混合ダブルス大会	泉	68
11/ 9(金)	WEEKDAY交歓会	宮	32
11/11(日)	連盟祭り	七北	87
11/17(土)	室内ダブルスを楽しむ会	SS	60
12/ 1(土)	総会 懇親会		45

《SS:シェルコムせんだい・宮:宮野原・七北:七北》

会員年齢層別構成図

事務局

委員長さんが本紙「ご挨拶」の中で引用しておられます平成13年度総会資料「会員年齢層別構成図」を掲載いたします。この構成図を作成するためのデータは平成2年度、平成7年度、平成13年度の会員データを使用いたしました。年度により会員総数の変動がありますので、会員実数での表示ではなく、5歳刻みの年齢層にあてはまる会員が総員に対して占める割合を%で示してあります。会員総数の変動は、平成初年から現在まで、290名から370名の間にあり、平成13年度の会員総数(年会費完納者)は297名です。凶中、平成16年度の%は、現会員が退会をしない、新入会員は無しという仮定で算出したものです。

この図を眺めてみますと、平成7年度まで、女子会員については5歳未満の会員が80%近くを占め、男子会員については60歳未満の会員が65%近くを占めておりました。これが、平成13年度になると、それぞれ38%、32%と激減し、会員の高齢化が進んでいる様子が明確です。近い将来には、連盟の会員は、ほとんどが女子55歳以上および男子60歳以上であるという姿が浮かんで来ます。

近々、時期をみて、会員諸氏のご意見を伺うためにアンケートによる調査を行うとのことです。委員長はまた、「他県との方々との交流や親善試合等の関わり合いをも含めて我々もこのような体制に沿ってゆくほうが何かと便利ではなからうか」とも述べておられます。会員の皆さんが意見をお寄せ下さる時の参考資料にしていただき、また、連盟発行の会報を1号から紐解きながら、当連盟の来し方をご紹介したいと思っております。

◇会員数の変動および年齢層の変化の大凡は先に述べた通りです。1986年に153名で出発しました。毎年、40~50名の会員の方々が、転勤、体調不良、その他の理由で入退会されております。会員数は増加の一途をたどり、翌年には200名を突破、1991年には300名の大台に突入しております。1995年に370名の大世帯時代を迎え、以後、少しずつ減少傾向にあり、ここ数年は300名前後の会員数を維持しております。

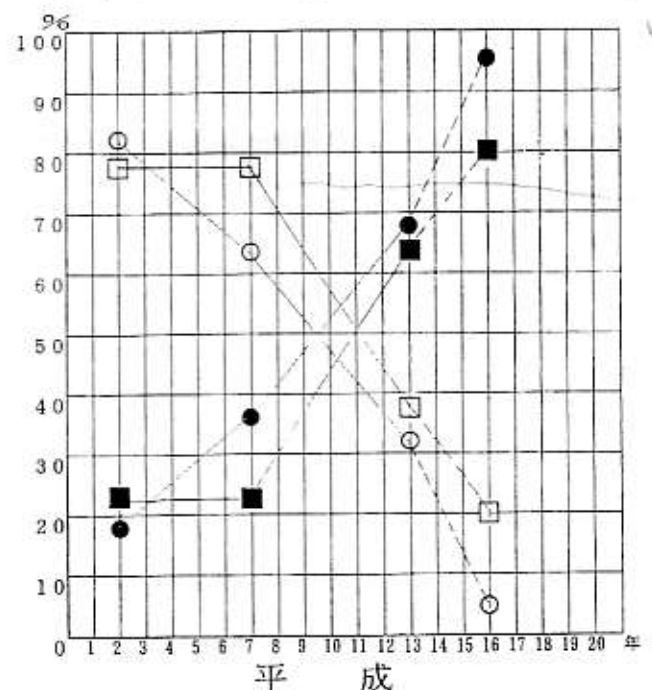
図示されております様に、平均年齢は急激に高くなっております。また、新入会される会員の年齢が年々高齢化の方向にあることも確かです。

本連盟は1986年に発足しておりますので、来年度は17年目に

(次ページへ続く)

会員年齢構成の変遷

男子60歳未満○ 女子55歳未満□
男子60歳以上● 女子55歳以上■



入ります。会員名簿の第1号は「1987年7月9日現在」という注釈付きで発行されております。会日総数が212名、女子会員66名で男子会員は146名でした。当時の入会申込書を調べてみますと、何故か、女子会員の申込書には「生年月日の欄」が未記入になっているものが多く、記入されているもの、会日資格年齢(40歳以上)にはほとんど値が書かれているものが少なからずあったりして、今回の「年齢別構成図」作りのデータにはなり得ませんでした。事務局としても「公文書偽造」の原因を突き止めようと努力はしましたが、とうてい、「無い知恵は搾れず」残念でした。ただ、一つ、原因があるとしたら次ぎのことではないでしょうか。初期のころの会報に掲載されている記事の中に、「女子会員の年齢条件は、自称40歳以上云々・・・」の文言が見受けられます。事実、40歳未満の会員もおいでになりました。また、多くの自称40歳以上の方々「公文書偽造」の罪の意識無しにテニスを楽しむことを「公然」と認めていたという当時の連盟のだらかさ?にも原因があったものと思われま。

閑話休題、本題にもどりましょう。1987年度の212名の会員の内、現在会員として留まっておられる方は62名に過ぎず、70%強の方々で連盟を去っておられます。留まっている方々は必然的に女子55歳以上、男子60歳以上になっているということになります。

高齢者がテニスを楽しむ環境も大きな変化がありました。1986年の発足当時には「ねんりんピック」はありませんでした。

第1回のねんりんピックは1988年でしたが、初期のねんりんピックテニス交流大会では「テニス」という「ボール遊び」を媒介として、全国の高齢テニスプレーヤーの交流と親善を図ることに主眼をおき、現在程、勝敗に拘ることなく、出場選手資格制限も緩やかでした。60歳以上のテニスプレーヤーの数も少なく、大きな都市をもたない地方の県では、毎年、同じ選手が続けて代表になったこともありました。東北6県の中では、「テニス先進県」を自負する宮城県においても、選手の選考に苦労がありました。当時は、仙台市はまだ政令指定都市ではありませんでしたので、仙台市を含む宮城県全体での選手選考でしたが、それでも同じ人が何度も選手として出場したことから、おして知るべしです。

連盟発足時以前の県テニス協会主催のベテランの公式戦は、男子45歳以上の単複のみでした。エントリー数は単複双方とも8ドローでした。当時、県営宮城野原テニスコートは、現在のNO.1コートからNO.8コートまでがクレーコート、NO.9、10が球足の早いハードコートでした。しかも、このハードコートはところどころヒビ割れがあり、雑草が顔を出しているというしるものでした。

春のトーナメントの開始式(当時は開始式がありました)で県協会の会長さんは次のような内容の挨拶を述べられたのが強烈な印象として残っております。

「ベテラン諸氏は一般男女の試合進行のオジャマムシにならないように、のんびりと草取りをしながら、ケガのないように、一番遠い端のコートで試合をして下さい。」

勿論、県協会会長さん独特のシャレを交えての挨拶であったでしょうが、当時の県テニス界における高齢者(45歳以上ですぞ!)プレーヤーに対する認識はこのようなものでした。各テニスクラブにおいても「お年寄り」の会員は冷遇され、コーチ連は若い会員さんだけに目を掛けてばかりで自分達には振り向きもしてくれないという不満が聞こえておりました。高齢者プレーヤー同士での交流や親善試合をしたくとも、そのきっかけやテニスをやるコート(公営)もありませんでした。まして、宮城県以外の東北5県の状態はもっと悲惨なものであったと推察されます。このような背景を踏まえての当連盟の設立でした。

設立に当たっての反響には、一通りのものがありました。「自分達が求めていたものが現実になる。クラブに入らなくてもテニスができるし、多くの人と交流試合ができる」という期待感と、「自分達の仕事の邪魔になる」という反感でした。前者は、勿論、高齢者プレーヤーの方々でした。後者は各テニスクラブからのものでした。この反感が多くのテニスクラブから出るとは予想外でした。このような高齢者のテニスの集まりが出来れば、高齢者のプレーヤーの数も増えるだろうし、テニスを楽しくプレーするための技術の向上を目指して、テニスクラブやスクールに入りたいと考える人も増えるであろうという私共の思惑とは相反する反響でした。したがって、連盟設立のために各クラブへお願いしたポスターの展示や入会申込書の配布は拒否されました。連盟設立後、各クラブに入会する高齢

者の数が急増しました。各クラブの予想は良い方向へ外れたのです。設立にあたり、各クラブが示した冷たい仕打ちにたいしては、「あえて知らなかった振りをする」ことにし、これが連盟の「味」であるとの自負を待とうというのが運営委員会のコンセンサスでした。

発足当時は、「月例会」と称して、月一回、日曜日に青葉山のクレーコートでダブルスのお楽しみ会が開催されており、盛会でした。大会ではないので、順位もつせず、まして、賞品や参加賞もありませんでした。クレーコートですので、雨天は勿論中止、前日雨天の場合は、当日朝早くから「コートのぞうきんがけ」や「ローラー引き」が大変でした。それでも、会員の皆さんは嬉々として、お手伝いをして下さったことが思い出されます。

公営コート少なかったこともあり、某テニスクラブにお願いして、WEEKDAYの午前中、クラブ会員が少ない時間帯に、コートフイを安くしてもらい、テニスを楽しまうという試みもありました。これが現行のWEEKDAY交歓会の始まりでした。経費は参加した人が負担をする、いわゆる「受益者負担」の原則が作られました。

この楽しい「テニスの集い」を東北の他県の人達にも、という機運が生まれ、「高齢者テニスの集まり」では先輩格の(いわきVTC)へ誘い掛けを行い、東北ベテランテニス交流大会が発足しました。この交流大会も好評でした。第一回は、言い出しっぺの宮城県が主管県となり、会場を(岩沼グリンピア)として開催されました。丁度、ねんりんピックの発足に合わせ、各県ともに、60歳以上のテニスプレーヤーの集まりを作り始めていた時期とも一致しました。この交流大会は、当初、各県別の団体戦形式で行われており、立派な優勝杯(東北電力にお願いして提供をうけました)が用意されました。しかし、「優勝杯獲得県は宮城県」という鉄則があたかもあるように、毎年、宮城県が優勝してしまうという現象が生じてしまいました。「団体戦は止めて、個人戦形式とし、各県からの入賞者数が平均化するような方法」はないものかと、いろいろ模索し、現在の形となったようです。

また、はからずも時期をほぼ同じくして、大阪在住で某会社の会長をしておられるS氏より、「自分の退職金をシニアテニスの発展の為に使用してほしい。」という申し出がなされ、現在の日本シニア連盟が発足しました。会員諸氏の多くの方々がこの集まりに参加されておりますので、改めて説明の必要もないと思います。一方、会員諸氏の技量の進歩には著しいものがありました。ご承知の通り、技量の進歩に伴い、テニスの面白さは倍増して来ます。先にも述べましたように、多くの会員の皆さんが、各テニスクラブやスクールに入ったり、練習会を開いたりして、それぞれ各自で「技量」を磨かれました。

技量別大会、年齢別大会、混合ダブルス大会等が本格的に始まり、優勝杯、レプリカも用意されました。各大会において技量別にA、B、C、D等のクラスが設けられました。「月例会」で単にテニスを楽しむだけではなく、「技量」を競い合う方向への若干の転向があったとも考えられます。その成果が顕著に現れました。なんと、ある年、当連盟から「全日本ベテランテニス選手権大会」に5名の出場選手を送ることが出来たのです。全日本ベテランテニス選手権大会に出場するためには、少なくとも、東北ベテランテニス選手権大会あるいはそれ以上の権威のある大会で優勝もしくは準優勝する必要があり、技量的にかなりのハイレベルが要求されます。

会員諸氏においては、技量の進歩とともに、テニスに関する知識をも豊富に持たれるようになりました。テニス・ルールは勿論、テニス大会のマネージメントに関しても県協会の公式戦よりも巧くマネージングされているとの評判すら得ております。前記しました日本シニア連盟の全国大会が東北(天童市)で開催された時は、主として当連盟の会員の方々で運営の中心となり、立派にその任を果たされ高い評価を得られたことは記憶に新しいところです。

会員のなかには、日本テニス協会公認の指導員(現在は日本体育協会公認指導員)の資格を持っておられる方も数人おられますし、団体開催にともない公認審判員の資格も沢山の方がお持ちです。資格はともかく、なかには公営コートを借り受けて、テニスのレッスンをしておいでの方々も見受けられるようになりました。連盟発足当時の会員の皆さんと現在の皆さんとは、テニスに関連する全ての面において格段のレベルの差が出来たことは確かです。テニスをやる環境(テニスコート、県協会の対応)も改善されました。

「会員年齢条件の改正」動議の提出を機に、連盟のこれからのあり方を熟慮する時期でもありそうです。会報のバックナンバーの在庫が若干数あります。希望される方は事務局までお申し出下さい。

平成14年度 年間行事予定表

日 時	行 事	会 場	コート数
1月29日(火)	室内WEEKDAY交歓会	シェルコムせんだい	6
2月28日(木)	室内WEEKDAY交歓会	シェルコムせんだい	6
3月30日(土)	室内ダブルスを楽しむ会	シェルコムせんだい	6
4月19日(金)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
5月14日(火)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
5月26日(日)	年齢別ダブルス大会	泉	12
6月12日(水)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
6月25日(火)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
7月 5日(金)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
7月21日(日)	フーフダブルス大会	泉	10
7月30日(火)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
8月 9日(金)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
8月25日(日)	技量別ダブルス大会	泉	10
9月 5日(木)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
9月17日(火)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
10月 2日(水)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
10月20日(日)	混合ダブルス大会	泉	10
11月 1日(金)	WEEKDAY交歓会	宮城野原	4
11月10日(日)	連盟祭り	川内	10
11月23日(土)	室内WEEKDAY交歓会	シェルコムせんだい	6
12月 7日(土)	平成14年度 総会 懇親会	未定	

室内テニスを楽しむ会

開催のお知らせ

運営委員会

例年になく雪の多い冬になりそうです。「積もっている雪が早くとけて、テニスが出来るとイナ！」皆さんの気持ち伝わってまいります。さて、今年もシェルコムせんだいで室内ダブルスを楽しみましょう。

国体開催時に張られていた防眩ネットが取り払われてしまい、少し見にくくはなりますが、寒い北風に悩まされ、「涙と鼻水?」とに悪戦苦闘することなく、また、降り積もる雪の心配もしないで、ひたすら「ホッカイロ」を懐にして、室内テニスを楽しみましょう。

下記のご案内のように、1月と2月の室内ダブルスは、室内ダブルスWEEKDAY版として、3月は「グループに別れての団体戦」形式でおこなわれます。寒さを吹き飛ばしてテニスを楽しみましょう。

◇室内ダブルス PART I

(室内WEEKDAY交歓会)

1月29日(火) 9:00~16:00

◇室内ダブルス PART II

(室内WEEKDAY交歓会)

2月28日(木) 9:00~16:00

◇室内ダブルス PART III

(室内ダブルス大会)

3月30日(土) 9:00~16:00

会費はいずれも 1000円/人です。PART I およびPART II は自由参加ですが、皆さんが楽しくプレーするために出来るだけ早くにお集まり下さい。

PART III はグループ組み合わせの都合もありますので前もって申し込みをして下さい。

◆◆申込先◆◆

◇◇申込期限◇◇

3月20日(ハガキに氏名を明記してお申込下さい)

編集後記

皆さんのご協力と、会報委員の原稿依頼お願いの努力によりまして、予定数をはるかに越える数の原稿が集まりました。編集に当たり、頂いた原稿は全て掲載する、掲載にあたっては出来る限り原稿をそのまま活字に表す(原稿に使用されている文字、文言、句読点は疑問をはさまずそのまま)ことを心掛けております。著者にチェックしていただく時間がないので、誤字、脱字があったり、読みにくい箇所があった場合、責任は全て編集者にあります。ご容赦ください。

委員長「ご挨拶」の中でも述べられております「規約改正」。規約だけの一部改正でよいのか、あるいは、連盟自体を「大変革」すべき時が来ているのか。新世紀の大きな課題では?。皆さんのお知恵をお貸し下さい。

 ※ 編集発行 宮城県壮年テニス連盟運営委員会 ※
 ※ 事務局 ※
 ※ *****